

生活を豊かにする生活単元学習の工夫

秋田県能代市立湊城南小学校 教諭 雄鹿 由加里

I 実践に当たって

本児は体を動かして遊ぶことが好きで、体育館の肋木を上り下りしたり、グラウンドで追いかけてをしたりして楽しく生活ができている。また、自然と触れ合うことが好きで、虫を捕まえて観察したり、花を観察したりしていることが多い。自閉症・情緒障害児学級であるが、知的な遅れもあることから児童の実態に即して、生活単元学習を中心として指導をすることにした。これまでの日常生活では未経験なことが多いため、いろいろな体験ができる生活単元学習の時間を楽しみにしている。作品づくりでは、見本を提示しながら一緒にスモールステップで取り組むことが多い。人とやり取りをしたり、自分から関わったりすることが苦手である。普段関わらない人や初めて遭遇する場面では、どのように対応したらよいか分からず、その場から離れてしまうことが多い。そこで、自分から進んで活動に参加したり、人との出会いの幅を広げたりできる場面設定の工夫が必要であると考えた。

II 実践内容

1 児童の実態から

友達と遊んでいて状況判断ができなくなると、その場から立ち去ってしまうため、対応の仕方を練習してきた。関わり方を練習したり、指導者が側について支援をしたりすることで、安心して関わるができるため、関わり方の幅を広げ学校生活をさらに楽しむことができるようにしたいと考えた。

2 活動への願い

花壇に咲いている花を見て「綺麗だ」「いろんな色がある」と感想を述べたり、生活科の時間に教科書を見て「どんな花が咲くんだろう」「本物を見てみたい」とつぶやいたりする姿が見られた。また、種が収穫できることを知り、「プレゼントをしたい」と前向きな反応をすることができる。

花を育てるという自分で今できることに加え、「面白そう」「それならやれるかも」「喜んでもらえそう」「ちょっとチャレンジしてみよう」という製作活動の付加価値を加えることで、継続的に楽しく活動ができるのではないかとと思われる。

育てた種や作った作品をプレゼントすることにより、相手から肯定的な評価を得やすくなり、意欲が持続できると思われる。相手の喜ぶ姿を思い浮かべながら、プレゼントを作りたいという意欲を持続させ完成にこぎつけることで、達成感や自己肯定感を育てられると考えた。

3 「かんしゃのきもちをとどけよう」の実践

(1) 花や野菜を育てる活動

生活科の栽培学習の定番であるアサガオの他に、教科書には数種類の野菜の花が掲載されている。その中から育てやすいと思ったヒマワリ、マリーゴールド、オクラ、枝豆を種から育てた。ミニポットに自分で種を植えることから始めたので、芽が出ることを楽しみにしながら世話を続けることができた。ミニポットから鉢に植え替えたり教科書と比べながら観察したり、興味をもって取り組むことができた。アサガオは押し花、染め出し、たたき染めなど、いろいろな活動ができるので複数の鉢で育て、10鉢以上の世話を意欲的に取り組んだ。オクラは鉢から畑に植え替え、世話を続けることができた。

アサガオ、マリーゴールド、ミニヒマワリは「芽が出ました」「大きくなってきました」「葉っぱが〇枚になりました」「花が咲きそうです」などと、成長を楽しみにしながら意欲的に毎日世話

を続けることができた。花が咲いた後に種ができることを知り、枯れた後も水やりを頑張っていた。種取りをした後は、教科書の種と比べたり、種まきをしたときの種の写真と比べたりしながら、種が同じであることや種の数が増えたことに驚いたり喜んだりした。



(2) 種の仕分け

花の種を種類ごとに分けて、A9サイズのチャック付きポリ袋に入れ、花の名前を書いたシールを貼り付けた。チャック付きポリ袋に種を入れたり、小さな枠に名前を書いたりするのは大変そうであったが、集中して取り組めた。

(3) しおり作り①

アサガオの花を使っての染め出し、たたきぞめ、押し花を体験した。1つ終わるごとに別の方法もあることを伝え、新しい技法を提示すると「それもやってみたい」と意欲をもって活動に取り組んだ。その後、ラミネート加工をして、しおりにした。



(4) しおり作り②

和紙とマーブリング液を使って台紙を作った。マーブリング液の色と色の組み合わせ方や液の量を変えることで、模様が変わる面白さを楽しみながら取り組むことができた。和紙が乾いたら4×15cm程に切り、マリーゴールドの種を散らしてラミネート加工して完成させた。

見本を提示したり、試したりしながら、手順表を確認して取り組んだ。一人でもできる、あるいはできたという達成感を味わうことで、より意欲的に製作活動に臨むことができた。

(5) メッセージカード

感謝の気持ちが伝わるように丁寧に書くことを心掛け、そのために自分から筆順や文字の大きさを確認しながら取り組むことができた。

(6) プレゼント袋のラッピング

しおり、種、メッセージカードの3点セットを入れるために葉書サイズのチャック付きポリ袋を使用した。半透明カラーシールを模様として貼り付けた。プレゼントする相手によってシールの貼り方や色を変えることを楽しみながら取り組んだ。



(7) プレゼントのお届け

「プレゼントです。どうぞ」の言葉を添えて手渡しをした。自立活動の時間を利用して、会話のやり取りの練習回数を増やすことで、自信をもってプレゼントを渡す相手と関わることができた。

「何の種ですか」「これは何ですか」「どうやって作りましたか」などの質問を受け、会話のキャッチボールを体験させる絶好の機会となった。



4 特別支援学級との関わり

コロナ禍であったので外部との交流の計画が難しかった面もあったが、可能な範囲で実施して会話の幅が広がることを期待し、同学年との交流学习や校内での大人との関わりに加え、特別支援学級（知的障害児学級）との関わりを取り入れた。一緒に活動をすることを重ねることで、学年が違ってても会話をする場面が、次の通り少しずつ増えていき貴重な体験となった。

- ・チューリップの花の摘み取りや球根堀り
- ・枝豆やジャガイモ、サツマイモ、オクラの栽培やミニクッキング
- ・お楽しみ交流（夏祭り・ゲーム大会・栽培した大豆での豆まき）
- ・買い物学習
- ・支援学級の6年生とのお別れ会（プレゼントや色紙作り）

Ⅲ 成果と今後の課題

1 成果

- ・相手が喜ぶことをイメージし、相手意識をしっかりとらせることで、楽しく意欲的に活動に取り組むことができた。
- ・活動にスモールステップで取り組んだり手順表を提示したりすることで、「できた」「自分でもやってみよう」と意欲をもって活動に取り組む姿が見られるようになった。

2 課題

- ・慣れた人との関わり方をさらに充実させたり、より多くの友達や大人と触れ合う場面を増やしたりして、自然な形でコミュニケーションとることができるよう実体験を積み重ねていきたい。
- ・人と関わりをもつことで学校生活が楽しくなってきたと感じているので、コミュニケーションスキルを少しずつ高め自信をもって会話も楽しめるようにしたい。肯定的な評価を積み重ねることで、人と関わることへの喜びをもたせることができると考えられる。関わりに慣れていく大人とさまざまな場面に関わることができる場面を設定し、会話のやり取りや関わりの中で、認め、ほめられる場面を意図的に設定したい。